

第2回シニア里山サミット

2012年4月23日（月）NPOプラザ3階会議室、出席者約60名

里山は、多様な生物がひしめいている貴重な世界です
民族の抒情がたどよい、癒しをもたらす安らぎの場所です
きれいな水を貯え、清浄な大気を生み出す、緑の大地です
里山を次の世代に受け継ぐために、活動と交流をしましょう

サミット配布資料より

議事

- 13時00分 主催者挨拶 シニア自然大学校 自然保護部 常勤理事 堤 正克
- 13時10分 講演 1. 環境政策とその先駆的事例
東京農業大学農山村支援センター 竹田純一先生
2. 森林管理とその先駆的事例
(独) 森林総合研究所 関西支所主任研究員 奥 敬一先生
- 14時30分 里山活動 事例報告
- ①東別院ふれあい道場 下野 武志
- ②調査研究部環境科 飯盛 秀穂
- ③奈良・人と自然の会 古川 祐司
- ④里山の山野草を守る会 福岡 定晃
- 16時30分 全体協議 里山活動の連携と交流
問題提起および提言 自然保護部 理事 福井 正樹



シニア自然大学校関係の里山活動の連絡協議会を、情報の共有化を行うために立ち上げた
いと、堤常勤理事の挨拶でサミットは開会した。

講演で竹田先生は、里山所有者は管理出来なくなっており、都市住民との「共同管理」の
メリット、タイプ、国の施策について説明があり、シニアのネットワーク化のメリットと
して「仲間化」、「色々な専門家が集まる」があるので期待したいという話があった。

奥先生は最近の里山の荒廃により「ナラ枯れ」「獣害」が問題になっている。かつて日本全
国の山林は木材の過剰使用により「ハゲヤマ」が多かった。明治時代の植林活動により現
在の森林が復活した。その後森林の循環的使用により維持保全されたが、樹木の伐採がお
こなわれなくなり、現在の荒廃を招いた。市民活動や企業のCSR活動により、生物多様
性の復活、低炭素社会への使命感をもって活動してもらいたいと話あった。

その後、各グループの里山活動事例報告があり、環境科の事例発表として飯盛さんの発表
があった。



(飯盛さんの発表風景)

<飯盛さん発表要旨>

報告テーマ：「六甲グリーンベルト（GB）整備事業」への参画

報告要旨：環境科が取り組む事になった「六甲GB整備事業」＝里山管理のいきさつ、
現在の活動状況、及び今後の方針を発表。

1) 「六甲GB整備事業」参画に至ったいきさつ：

2009年6月、神戸市東灘区にある国交省・六甲砂防事務所を見学。午前中は砂防の
重要性やデモ機を使っての土石流発生メカニズムを教わる。午後はバスで砂防の為の堰
堤工事現場と市民参画型の“グリーンベルト整備事業”のモデル地区を見学。

当時の環境科には来年（2010年）に開催予定のCOP10の“生物多様性”に関す
る話題があり、また環境科としてもっと社会貢献すべし・・・といった雰囲気があった。

GB整備事業の現地を見て、我々でも出来そうであり、結果的に社会貢献活動であると

して環境科で取り組む事となった。都市環境・緑化Gが担当となり、「森の世話人」事務局と折衝、アクセスの良い渦が森地区の一角を担当することに決定。⇒「渦が森・環境の森」と称す。

2) 現在の活動状況：

2009年10月から現地に入り活動開始。全面ネザサに覆われていたが最初に10m×10mの調査域を設定、このエリアでネザサの中に生えていた植物を抜き取り、記録に留める。同定は植物科の応援で草本12種、木本12種合計24種を確認。

当地での活動はネザサの伐採が全てのスタートで、2010年4月から開始。環境科として年2回の活動スケジュール（4月、11月）で、昨年11月まで4回の伐採活動を行ったが、ネザサの再生能力は極めて強く、イタチごっこの状態。この春の様子から多少勢いは弱まったか・・・と思えるが、春から夏を経験しないと判定出来ない。

3) 今後のあり方：

最初のネザサ伐採の1ヶ月後(2010.5月)に調査域を訪れたところ、コナラやアラカシの実生の芽が出ているのを発見。しかし半年後の11月にはネザサに負けたか全く発見出来なかった。ネザサが衰退した後の調査域で、どんな植物が生えてくるのか見届けたい。

今後は上部のネザサを伐採し、かつて植樹されたと思われるサクラ等が育つ環境にまで整備を続けたい。

各グループの発表のあと、福岡理事より、かつての里山の豊かさと美しさを知っている最後の世代としてシニアの里山活動の「連携化と交流」そして次世代への伝承のために協議会設置の提案があった。

議論が行われたが、各グループのさしあたっての問題点は提起されず、今後問題点を整理してから協議会の設置の検討を行うということでサミットは17時10分閉会した。

文；飯盛、石井 写真；石井